

中国語の結果構文に関する研究

著者	石村 広
号	19
学位授与番号	267
URL	http://hdl.handle.net/10097/37062

いし
石むら
村ひろし
広

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 267 号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 言語科学専攻
学位論文題目	中国語の結果構文に関する研究 —VR構文の意味構造とヴォイス—
論文審査委員	(主査) 教授 千 種 眞 一 教授 後 藤 齊 教授 花 登 正 宏 准教授 小 泉 政 利

論文内容の要旨

1. 本研究の目的

本研究の目的は、現代中国語の「動詞＋結果補語」構造(Verb-Resultative Complement Compound)に典型的な原因－結果型の構造(以下、VR構造と略す)の分析を通じて、一般言語学の領域に新たな知見を提示することにある。典型的なVR構造は、「他動詞＋自動詞(または形容詞)」という組み合わせからなり、何らかの働きかけが受け手の状態変化を引き起こすことを表す。このような2つの出来事の因果関係によって状態変化を表す文、つまり行為と結果を表す文を「結果構文(resultative construction)」という。中国語結果構文には、「把」構文、動詞コピー構文、「V得」構文などいくつかの異なる文法形式があるが、本研究が考察対象とするのは無標識のVR構文である。例えば、次のような文である。

(1) a. 武松 打 死 了 老虎。

武松 殴る－死ぬ ASP 虎

(武松は虎を殴り殺した。)

VR構文に関する先行研究には、既に夥しい量の研究データの蓄積がある。これまで議論されてきた重要な研究課題を整理すると、次の3つにまとめることができる。

1 つめは、形成レベルの問題である。これは、語彙レベルの形成を主張する立場(Thompson1973, Li1990, 1993, 1995, Cheng and Huang1994, 沈力1993他)と統語レベルの形成を主張する立場(Hashimoto.A1964, 1971, 望月1990a,b, 山口1991, Sybesma1999, 王玲玲2001他)で意見が分かれている。

2 つめは、主要部(head)の位置をめぐる問題である。この用語の使い方は研究者によって若干異な

るが、Vを主要部とする立場(Li1990,1993,1995, Cheng and Huang1994, Sybesma1999, 袁毓林2000, 王玲玲2001, 沈家煊2003他)とRを主要部とする立場(李临定1984, 马希文1987, 沈力1993, Tai2003他)の間で意見が分かれている。

3つめは、使役の意味の出どころに関してである。VとRはそれぞれ単独の述語としては使役の意味を表すことができないが、VR構造全体は使役他動詞(状態変化動詞)としての機能を有する(上例の(1)において、他動詞+他動詞の組み合わせ、すなわち“打杀”(殴る+殺す)は容認されない)。このVR構造の使役義は、一体どこから来るのであろうか。

上記の諸問題は、一般言語理論の方法論と密接に関連している。しかしながら、既成の普遍仮説は、印欧語、とりわけ英語をもとにして開発されたものである。そのような理論的前提を類型論的特徴が著しく異なる中国語のような孤立型言語(isolating language)にも直ちに適用することができるのであろうか。本研究の出発点はそこにある。

本研究では、VR構造を2つの動詞述語が並置された(juxtaposed)形式、すなわち動詞連続構造(serial verb construction)であると仮定し、次の2点を主張する。

①VR構文の文法的意味(使役義)は、語順が担い表す。

②VとRの結合は、RにVを継ぎ足す形をとる。

①は、意味と統語形式の関連性に関する主張であり、②は、VR構造の結合パターンに関する主張である。中国語結果構文の使役義は、語順を利用した統語的な型の力から来るものである。2つの述語が複合化を果たすことにより、目的語に対する使役力を強化する意味合いを持つのである。①が示す使役義獲得の方策は、語彙的ヴォイス(つまり、自他交替)と連動しているのである。そもそも形態変化に乏しい中国語においては、形態論と統語論の間に明確な境界を設けることはできない。中国語結果構文は統語的に形成されるが、VR構造の文中での振る舞いには語彙的な性格が濃厚に認められる。

さらに、上記2点の主張に基づきながら、意味構造の異なるタイプについて考察し、新たに〈他動型〉、〈受動型〉、〈自動型〉、〈原因型〉という4つのタイプを提案する。

(2) 孩子 撕 破 了 书皮儿。 〈他動型〉

子供 引き裂く-破れる ASP 本の表紙

(子供が本の表紙を引き裂いて破った。)

(3) 书皮儿 撕 破 了。 〈受動型〉

本の表紙 引き裂く-破れる ASP

(本の表紙が引き裂いて破れた。)

(4) 张三 喝 醉 了。 〈自動型〉

張三 飲む-酔っ払う ASP

(張三は飲んで酔っ払った。)

(5) 这 瓶 酒 喝 醉 了 张三。 〈原因型〉

このCL 酒 飲む-酔っ払う ASP 張三

(この酒が飲んで彼を酔わせた。)

一般言語学にとって、個別語研究の本来的な意義が従来の理論仮説に新たな証拠を提示することにあるとすれば、孤立語タイプに属する中国語は、人間言語の多様性を示す上で好材料の言語となるはずである。

本研究は、以上のような観点に立ち、伝統的な中国語文法の記述に再検討を迫るとともに、一般言語理論に基づく結果構文研究の領域に新たな証拠を提示することを目的とする。

2. 従来の結果構文分析の問題点

一般言語学は、人間言語の普遍性と多様性を探求する学問であり、理論と実際の両面から研究されるべきであることは言を俟たない。とりわけ結果構文は、意味論と統語論の接点にある問題として、この30年あまりの間、多くの研究者の注目を集め、活発な研究が行われてきた。日英語結果構文の体系的な違いを扱った代表的な論考に、影山(1996)、影山(編)(2001)、Washio(1997)、鷲尾(1997)がある。これらの研究成果によると、結果構文には主に2つの類型、すなわち、①状態変化動詞(Vendler(1967)/Dowty(1979)の達成動詞(accomplishment verbs))の内在的意味に刻み込まれている「変化した状態」を結果述語によって特定化する「本来的な結果構文」または「弱い結果構文(Weak Resultatives)」と②行為動詞(Vendler(1967)/Dowty(1979)の活動動詞(active verbs))に結果述語が加わることによって限界の事態を表す「派生的な結果構文」または「強い結果構文(Strong Resultatives)」があるとされる。

類型論的に重要な主張は、「派生的(強い)結果構文」の成立は「本来的(弱い)結果構文」の成立を含意するが、その逆は成り立たないという階層性にある。つまり、両者は包摂関係にある。日本語は「本来的(弱い)結果構文」のみ可能な言語であり、英語は「派生的(強い)結果構文」を許容する言語である。そして、結果構文を有する言語は、日本語型・英語型のいずれかに振り分けることができると考えられている。例えば、ドイツ語、オランダ語、イタリア語、スペイン語、ロシア語などは英語型であるが、朝鮮語、インドネシア語、モンゴル語などは日本語型であるとされる。このように、従来の結果構文の分析では、主要動詞(matrix verb)によって語彙的に含意される結果部分がより詳しい指定を受ける状態変化動詞を使った「本来的(弱い)結果構文」を典型的な類型と仮定し、世界諸言語の結果構文の類型化を試みるのである。

しかし、中国語は、彼らが提唱する世界諸言語の結果構文の類型に当てはまらないものと考えられる。中国語の場合、原因を表す前項述語の意味特徴の違いから結果構文の形成問題を論じようとする、例外ばかりが目立つようになる。

(6) a. 他 喊 哑 了 嗓子。

彼 叫ぶ-かれる ASP 喉

(彼は叫んで喉をからした。)

b. 那 个 人 冻 僵 了 脚。

その CL 人 凍える-かじかんでいる ASP 足

(その人は凍えて足がかじかんだ。)

c. 他 饿 坏 了 身体。

彼 餓えている-壊れる ASP 体

(彼は飢えて体を壊した。)

既成の理論的枠組みでは、(6a)のようにVの位置に非能格動詞“喊”(叫ぶ)が現れることは予測可能だが、(6b)における“冻”(凍える)のような非対格動詞や(6c)における“饿”(餓えている)のような形容詞が現れると、うまく説明できなくなる。ACTやDOといった概念的意味(意図性)を持たない1項述語は、他動的な結果構文を形成できないと考えられているからである。

また、生産性の面においても、中国語は「派生的(強い)結果構文」よりも柔軟性がある。中国語結果述語の付け替えの自由度は、英語よりもさらに高い。

- (7) 吃饱(食べて腹一杯になる)、吃膩(食べ飽きる)、吃病(食べて病気になる)、吃胖(食べて太る)、吃穷(食べて貧乏になる)、吃晕(食べて目眩がする)、吃累(食べ疲れる)、吃瘦(食べて痩せる)、吃吐(食べてもどす)、吃烦(食べ飽きる)

さらにもう1つ、文頭の主語が前項述語の外項(動作者)と一致しない〈原因型〉結果構文の存在を指摘することができる。

(8) 这 瓶 酒 喝 醉 了 张三。

この CL 酒 飲む-酔っ払う ASP 张三

(この酒は张三を(飲んで)酔わせた。)

上例では、原因(Causer)の意味役割を担う主語“这瓶酒”(この酒)は前項述語“喝”(飲む)の内項(受動者)と一致しており、肝心の外項(動作者)は文末の目的語位置に具現している。この種の用例も、影山(1996)やWashio(1997)が提示する類型には適合しない。主要動詞への埋め込みや下位事象の上位事象への合成といった理論分析を用いて、〈原因型〉の内部の仕組みを説明するのは困難である。異質な言語の研究が啓発的であることは、日英語の対照研究の成果によっても明らかである。印欧語を中心に展開されてきた言語理論は、素材を中国語のような類型的特点の異なる言語に求めて熟慮することによって補正され、さらに高度な一般性が得られるものとする。

3. 本研究の構成と各章の内容

本研究の構成と各章の内容は、以下のようになっている。

序章

第1章 先行研究について

第2章 〈他動型〉結果構文の形成

第3章 中国語結果構文のAspect特性

第4章 中国語使役構文の形式と意味

第5章 2種類の自動的結果構文

第6章 〈原因型〉——周辺的な結果構文とその拡張パターン

結論

第1章では、中国語結果構文の形成に関する2つの代表的な理論的アプローチ、すなわち語彙部門での形成を主張する立場に立つ先行研究(Li1990,1993,1995, 沈力1993, Cheng and Huang1994)と統語部門での形成を主張する立場に立つ先行研究(Hashimoto.A1964,1971, Lu1977, 湯廷池1992a,b, Sybesma1999, 王玲玲2001)を概観する。語彙レベルでの形成を主張する項構造分析には、擬似受動文など多くの反例が存する。しかも、単一節構造(mono-clausal structure)を仮定しているために、“那场饥饿死了很多人”(あの飢饉が多くの人を餓死させた)のような述語の項構造と一致しない主語名詞句を持つ用例については、使役の事象構造(bi-clausal structure)を使った分析に依存せざるを得ない。C&H(1994)は、非対格用法を持つ〈能格型〉と〈原因型(または使役型)〉の交替現象を指摘している。これは一見、原因主語の導入に対して合理的な説明を与えているかに思える。だが、当該論文では〈能格型〉が等位的な結合として捉えられており、原因主語が統語上に具現する動機が不明である。また、〈原因型〉は〈能格型〉だけでなく〈非能格型〉からも派生する。この問題についてHuang(2006)は、非能格動詞が軽動詞BECOMEと融合して外項を持たない非対格動詞に転化すると分析しているが、中国語の言語事実に反するので受け入れることはできない。

一方、統語レベルの形成を主張する立場では、VRを複合動詞ではなく、合成述語として捉えようとする。Hashimoto.A(1964,1971), Baron(1971), Lu(1977)は、使役の意味機能に基づく統語的分析の有効性について詳しく論じている。だが、使役の出どころと結果述語に移動が生じる理由については、何ら解決策を提示していない。GB理論を採用する湯廷池(1992)は、VR構造が形成される場合に限って後

項述語に古代使動用法が顕在化すると主張する。だが、後項述語が使役動詞化するという経験的証拠を得ることはできない。また、ミニマリスト理論を採用する王玲玲(2001)は、結果述語の移動現象と使役義獲得の問題をvp-shellを用いて合理的に説明している。だが、軽動詞の役割の一つは、語の素性分解、すなわち動詞の語彙的意味を分解することである(Radford1997[2000])。VRの構成要素が軽動詞CAUSEと融合している(使役動詞化している)という統語的証拠は、やはり見つからない。このように従来の分析では、中国語結果構文の使役の意味の出どころや述語の複合現象の動機について、十分納得のいく説明を与えてくれない。

第2章は、本研究の中核的な内容となる。本章では、中国語結果構文の形成に関する代案として、次の2点を主張する。

①中国語結果構文は、統語的な型の力、すなわち語順を利用して使役を表す。

②VR構造は、R(結果)にV(原因)を継ぎ足す結合パターンを持つ。

このことを先程の(1)の用例を使って図式的に示すと、次のようになる。

(9) 原因出来事 結果出来事

武松 打 死了 老虎

↓ (a) 語順の逆転による複合化

(b) 語彙的使役機能の獲得

複合化によって形成される「打死了老虎」という語順(a)は、目的語「老虎」に対する使役力を強化した文法形式となる。VRを一語動詞に見立てた「動詞+目的語」構造の持つ統語的な型の力(つまり、VR+Oという語順)を利用して、「虎を死に至らしめる」、つまり「殺す」という使役性の優れて高い場面状況を表現するのである(“*武松打老虎死了”は容認されない)。VR構造全体が一語の使役的他動詞に相当するのは、このような理由による(b)。結果述語が名詞句に付与する意味役割は、元来、対象(Theme)であるから、これがVR構造の目的語位置に具現するのは、決して不自然ではない。中国語結果構文が語や接辞などの文法要素に依らなくても状態変化使役を表すことができるのは、このような仕組みによる(以上、①の説明)。

Rに用いられるこの種の1項述語は、体系的に他動詞用法(古代語の使動用法)を失っており、Vと結合することによってしか変化対象となる目的語を取ることができない(“*他死了老虎”(彼は虎を死なせた)は容認されない)。①で示した使役義獲得の方策は、語彙的ヴォイス(自他交替)と連動しているのである。この「結果に原因を継ぎ足す」形成パターンを持つ結果構文は、影山(1996)やWashio(1997)をはじめ、従来の結果構文研究には見られないタイプのものである(以上、②の説明)。

本研究の主張は、歴史文法の記述にも整合する。印欧語を文法モデルとする理論言語学のアプローチでは、ACTやDOの概念的意味を持つ行為動詞を基点にして結果構文の研究・分析を行ってきた。この理論的枠組みでは、英語や日本語のように主要動詞がはっきりしている言語どうしの比較は可能であっても、文法的意味の出どころが異なる中国語のような言語の位置づけは困難である。非階層的なVR構造に、統語特性を決定するという意味での主要部は想定しにくいと思われる。また、伝統的な中国語文法の世界では、結果述語は補語(complement)とされてきたが、これは実辞と解すべきである。中国語補語の構成員は、実辞的要素から虚辞的要素まで多種多様である。これらの中身についても具体的に精査する必要がある。

続く第3章と第4章は、上記2点の主張を体系的観点から検証することに眼目が置かれている。第3章では、先行研究の成果を踏まえ、中国語動詞の語彙的アスペクト特性が、本研究が主張するVRの結合パターンと整合することを述べる。中国語の一般動詞の意味範囲は、動作対象の変化結果まで及んでお

らず、専ら動作・行為のみに重点がある。

(10) 张三 杀 了 李四 两次, 李四 都 没 死。

张三 殺す ASP 李四 2回 李四 いずれも NEG 死ぬ

(張三は李四を2回殺したが、李四は死ななかった。)

中国語はたとえ“杀”(殺す)のような他動詞であっても、変化結果をその意味範囲に含めず、専ら動作・行為に重点を置いた表現が可能となる。“杀”には目的語“李四”の“死”(死ぬ)という情報までは含まれていないということである。つまり、限界の事態を叙述するVR構造には、原因と結果の間にかなり明確な役割分担が存在するのである。このような言語の目的語名詞句の意味役割には、動作の受け手を表す受動者(Patient)と変化主体を表す対象(Theme)という2つ意味役割が必要である。

Vendler(1967) / Dowty(1979)のアスペクト・タイプに基づく動詞分類に照らすと、結果達成の含意に乏しい中国語動詞は、状態変化動詞(達成動詞(accomplishment verbs))クラスを持たないが、この動詞体系の空白部分を埋め合わせるかのように、VR構造は状態変化動詞と同等に振舞う。しかし、breakのような英語の状態変化動詞と異なり、VR構造のアスペクトは完了相のみによって特徴づけることができる(Tail1984)。中国語は結果を大変重視する言語であり、結果構文の表現の視点は、まさに変化を被る対象のところに位置しているのである。

(11) <行為> <結果>

英語 →
中国語 ←

中国語結果構文の原因と結果の結合パターンは、英語のような言語とは極めて対照的である。当該構文の生産性の高さは、このような結果から原因を眺める視点の方向性を反映している。

さらに第4章では、先行研究の内容を踏まえ、Comrie(1989)の使役構文の分類を中国語使役表現の実情に当てはめて検討する。そして、分析的使役文(兼語式使役文: N1+V1 + N2 + V2)との関係性からVR構造の体系的な位置づけを行い、第2章における2つの主張内容を検証する。兼語式使役文の第1動詞は、通例、「使役動詞(“使令动词”)」と呼ばれるが、これらは結果の含意に乏しく、純粋な使役動詞と見なすことはできない。使役表現は因果関係の成立を必然的に含意するが、兼語式使役文はこの種の含意が極めて成立しづらいのである。このような中国語の分析的使役文は、一般言語学の使役の概念から逸脱した表現である(ただし、原因主語を取る書面語的な“使”類を除く)。これが使役を表すと解されるのは、類像性を反映した語順がもたらす因果関係の類推による。つまり、孤立語タイプに属する中国語では、使役性の強弱という意味の違いが、分離型と複合型という2つの統語形式の違いとなって現れるのである。

(12) N1 + V1 + N2 + V2 (分析的使役表現)

* V2は意志動詞(ただし、“使”類を除く)

N1 + V1 + V2 + N2 (語彙的使役表現)

* V2は非意志動詞または形容詞(1項述語)

兼語式使役文とVR構文の形式上の違いは、原因と結果の関係の介在度、すなわち使役性の高低という意味の違いから捉えることができる。兼語式使役文との関係から見ても、目的語を複合述語の支配下に置くVR構文は使役力を強化した文法形式であり、動詞連続構造と見なすのが妥当である。ゼロ形態の使役構文は、Comrie(1989)の分類には取り上げられていない。使役構文の通言語的な分析には、異質な言語タイプを交えた慎重な考察と検証を重ねる必要がある。

第4章までは他動的変化を表す結果構文の問題を中心に議論するが、第5章では、中国語の自動的結

果構文について検討し、これに2つのタイプがあると主張する。1つは、“杯子洗干净了”(コップが洗ってきれいになった)のように、〈他動型〉の項の降格によって派生する〈受動型〉である。これは、原型の他動詞(状態変化動詞)に見られる「脱使役化」と重なる。中国語において脱使役化がもっと注目されてよいと思えるのは、この語彙的な文法現象が中国語の受動化の本質に関わっていると考えられるからである。

もう1つは、“他走累了”(彼は歩き疲れた)のように、文頭の主語がVとRそれぞれの意味上の主語と一致する〈自動型〉である。この自動的結果構文は、「自分で自分がある結果状態にする」という再帰的意味構造によって捉えることができる。つまり、これは、使役者(動作者)と変化対象を同一視する「反使役化」という語彙的な文法操作と重なる。このように、中国語結果構文に認められる2種類の自動的結果構文、〈受動型〉と〈自動型〉の主語名詞句の意味役割は、いずれも対象(Theme)であると考えられる。

〈自動型〉のVR構造を等位的な結合体として捉えるべきではない。本研究の説明を用いれば、前項述語が非能格動詞であっても、主語名詞句の意味役割を対象(Theme)と見なすことが可能となり、従来の〈非能格型〉と〈能格型〉という分類を廃して1つのタイプにまとめることが可能となる。つまり、〈自動型〉の主語の意味役割は動作者(Agent)ではなく、対象(Theme)であることを示すことができるので、〈非能格型〉から〈原因型〉が派生する問題(Chen and Huang1994, Huang2006)を体系的に解消することができる。また、この説明によって、中国語が「直接目的語制約」の反例にならないことを示すことができる。

そして、最後の第6章では、“这瓶酒喝醉了他”(この酒は彼を飲んで酔わせた)のように、文頭の主語が前項述語の意味上の主語(動作者)と一致しない周辺的な中国語結果構文の問題を取り上げる。このタイプは、文頭の主語の意味役割が原因(Causer)であることを特徴とする。この〈原因型〉の内部構造について、本研究では、二重使役の意味構造を提案する。すなわち、〈原因型〉は、再帰構造を持つ〈自動型〉が原因主語を導入した結果、産出される。項整合の条件を満たしていない名詞句が主語位置に具現する動機は使役交替にある。二重使役の意味構造を提案する本研究の分析は、原因項には使役動詞の関与が必要であるとするGrimshaw(1990)の精密意味論の考え方にも符合する。

〈原因型〉の主語は、前項述語の意味上の主語(動作者)にある状態変化を引き起こすエネルギーを供給するものであるから、この述語よりも先方に継ぎ足される見立てになる。要するに、この2つ目のCAUSEの継ぎ足しは、VR構造の結合パタンの方向性を拡張したものとして捉えることができる。中国語の因果関係を捉える視点は、一貫して結果から原因へと向けられているのである。

4. 結論

中国語結果構文を動詞連続構造の一種とみなす本研究の結論は、以下の通りである。

1つは、中国語結果構文の使役の意味は、語順を利用した統語的な型の力を利用することによって生じる、ということである。VR構文の文法形式は、目的語に対する使役力を強化する意味合いを持つ。文法的意味を語や形態素に還元しようと試みる従来の分析では、この点が見過ごされてきた。2つの述語動詞の並置(juxtaposition)を特徴とする中国語結果構文に、統語特性を決定するという意味での主要部は想定しにくい。

もう1つは、VR構造の結合パターンは、RにVを継ぎ足す、ということである。Rは、現代語において他動詞機能を失っている。したがって、これは原因を表す述語と接合しなければ対象目的語を取ることができない。語順を利用した使役義獲得の方略は、自他交替(R→VR)と連動しているのである。結果述語を軸に形成されるタイプは、従来の結果構文研究において記述されてこなかった。明示的な語形変

化に乏しく、孤立語性の強い中国語では、このように形態論と統語論の境界が往々にして曖昧になる。中国語結果構文の生産性の高さは、「結果に原因を継ぎ足す」この形成パターンがもたらすものである。

さらに、中国語結果構文には、〈他動型〉、〈受動型〉、〈自動型〉、〈原因型〉という4つのタイプが認められる。これらは、広義のヴォイス(自他交替)の角度から、次の2種類の派生関係によって捉えることができる。

I. 〈他動型〉————→ 〈受動型〉

項の降格

II. 〈自動型〉←———— 〈原因型〉

原因項の導入

中国語の結果構文には、〈他動型〉から〈受動型〉が派生する「他→自」の交替パターンと〈自動型〉から〈原因型〉が派生する「自→他」の交替パターンが存する。

とりわけ、未解決の重要な研究課題の1つは、前項述語が非限界的な非能格動詞を取るタイプ(Chen and Huang1994の〈非能格型〉)からも〈原因型〉が派生することであった。原因項には使役動詞の関与が必要である。本研究の主張に基づけば、〈自動型〉は使役構造を持つことを示すことができるので、そこから〈原因型〉が派生する問題を体系的に解消することができる。

派生的(強い)結果構文よりも広い範囲を許容する中国語の結果構文には、動詞の意味的な制約とは別の原理が働いている。印欧語を文法モデルとした道具立てや理論的枠組みを用いて、当該構文の使役の出どころや〈原因型〉が派生する動機を的確に指摘するのは困難である。英語結果構文は行為動詞に結果を継ぎ足すという派生方向を有するが、中国語は、譬えて言えば、変化結果(完了点)からそこに至るプロセスを眺める言語である。中国語の因果関係を捉える視点は、一貫して結果から原因(行為)へと向けられているのである。影山(1996)やWashio(1997)の類型が中国語にうまく適合しないのは、このような理由による。世界諸言語の結果構文について議論する際は、構文形成のメカニズムの質的違いにも十分留意しなければならない。

以上

論文審査結果の要旨

本論文は、現代中国語で生産的な原因—結果型のVR構造の分析を通して、伝統的な中国語文法の記述に再検討を迫り、一般言語理論に基づく結果構文研究に新たな証拠を提示したものである。

第1章では、先行研究を概観し、従来の理論的分析では、孤立語タイプに属する中国語の結果構文の使役義の出どころや述語の複合現象の動機を合理的・体系的に説明できないことを指摘する。

第2章では、①〈他動型〉と呼ばれる典型的な他動的結果構文の使役義は述語の複合化によって生じる「動詞+目的語」(VR+O)という語順が担い表すこと、②VRの結合パターンは結果を表すRに原因を表すVを継ぎ足す形をとることを主張する。既に他動詞用法を失っているRがVと結合することによって他動詞の意味を獲得する過程を惹起するこの形成パターンは、従来の結果構文研究において記述されていなかったタイプであることが論じられる。

第3章では、変化性や結果性に乏しい中国語動詞のアスペクト特性が、前章で提示された「結果に原因を継ぎ足す」結合パターンと整合することを検証し、さらに、VR構造のアスペクトは完了点のみによっ

て特徴づけられることから、中国語が基本的に結果重視型の言語であり、表現の視点は変化を被る対象のところに位置していることを看破し、VRがRを軸に形成されることの妥当性を主張する。

第4章では、兼語式使役文との関係性からVR構造の体系的な位置づけを行い、第二章の主張内容を検証する。使役に関してゼロ形態である兼語文とVR構文の形式上の違いは、原因と結果の関係の介在度すなわち使役性の高低の違いから捉えることができ、動作対象を複合述語の目的語位置に据えるVR構文は使役力を強化した文法形式であり、動詞連続構造として捉えるのが妥当であると論ずる。

第5章では、2種類の自動詞結果構文、すなわち〈受動型〉と呼ばれる自然被動文と〈自動型〉と呼ばれる再帰的意味構造をもつ構文の文法構造について検討し、これらに現れる主語名詞句の意味役割はいずれも対象または経験者であると主張する。

第6章では、従来の分析では解明されなかった〈原因型〉結果構文に二重使役の意味構造を提案し、再帰的意味構造をもつ〈自動型〉が原因項を導入されて派生したものであり、原因項の継ぎ足しはVR構造の派生方向を拡張したものであることを明快に論じている。

本論文は、中国語結果構文の〈他動型〉を主軸にして、〈受動型〉〈自動型〉、さらに周辺的な〈原因型〉の形成パターンはすべて、結果に原因を継ぎ足すVR構造の結合パターンによって特徴づけられる連続体として捉えることが可能であることを合理的・体系的に論じた説得力ある研究である。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。

目要の果語査書文論